

## 004 TICA

題名	著者	感想
1Q84	村上春樹	<p>内容は前回の「チョイス」で書いてあったので省略。意外に普通で読みやすかった。ただあいかわらず性描写がきつくて苦手。気になったのが、村上春樹ともあろう人が『犯罪を犯す』という使い方をしていた。間違えているのに使ってしまう言葉があるのはわかる。私も「全然OK」とか間違えているのをわかっていてノリやニュアンスで使うときがある。でも村上春樹じゃん、と言いたくなる。大正のころは「とても」が否定の言葉で「とてもきれい」といった使い方は間違っていたらしい。「全然きれい」と同じ使い方ってことなんでしょね。言葉は生き物だから変わっていくのは当たり前。「後で後悔する」なんてあまりに耳に馴染んで市民権を持ちつつある。そのうち「頭痛が痛い」も普通に使われるようになってたりして。Caccoさんはよく「期待して待つ」ってメールに書いてあるけど、あれは冗談なのか本気なのか訊けないでいる。</p>
プリズン トリック	遠藤武文	<p>刑務所内での密室殺人。社会派でありながら超本格。読み落としていい箇所はラスト一行までどこにもない。あなたは絶対に鉄壁のトリックを見破れない。そして必ず、二度読む。第55回江戸川乱歩賞受賞作。</p> <p>人の書き分けがわかりにくいいうえに、主人公が誰なのかもよくわからなかった。刑務所の内部の説明も密室トリックの想像が出来るほどではなかった。最後の1行で「え?!」と思ったのは本当。それがだまされたという驚きじゃなく、あまりに唐突すぎて「え」のあとは「おいおい」。</p>
ルパンの消息	横山秀夫	<p>15年前、自殺とされた女性教師の墜落死は実は殺人一。警視庁に入った一本のタレ込みで事件が息を吹き返す。当時、期末テスト奪取を計画した高校生三人が校舎内に忍び込んでいた。捜査陣が二つの事件の結び付きを辿っていくと、戦後最大の謎である三億円事件までもが絡んでくるのだった。時効まで二十四時間、事件は解明できるのか。</p>
雪冤	大門剛明	<p>平成5年、合唱団に所属する二人が殺害され容疑者として逮捕された男は一貫して容疑を否認していたが死刑が確定してしまう。事件発生から15年後、事態が急展開する。被害者遺族と加害者家族の視点をちりばめ、死刑制度と冤罪という問題に深く踏み込んだ衝撃の社会派ミステリ。横</p>

		溝正史ミステリ大賞、テレビ東京賞W受賞作。 メロスを題材にして題名も話も重くかたいのだけれど、犯人をメロスだのディオニスだの呼び方がなんともそぐわない。先導役もすぐにわかっちゃうし。
弟の家には本棚がない	吉野朔実	このシリーズを最初に読んだ感激が薄れたのは、慣れたからか、読んだときの体調が悪かったからか。 この人の本によく出てくる穂村弘という歌人が読売新聞に月に一度エッセイを載せている。新聞では吉野朔実の名前は出てこなかったけれど、本を読むと頻繁に出てくるようで、穂村弘を愛読しているグリコのいうことには「この人はきっと吉野朔実しか友達がいらない」。
家族の行方	矢口敦子	知り合いの編集者から少年の失踪調査を依頼された女性推理作家の「私」。慣れない探偵活動に着手するが…。安住の地を求めて彷徨う少年を通し、「家族」の意味を問い掛ける緊迫の心理ミステリ。
愛が理由	〃	親友の突然の死を知らされた39歳の翻訳家・麻子。死因が納得できない麻子の前に現れた美少年・泉は、年上の女性を翻弄し心中に見せかけ死に迫いやる「心中ゲーム」の存在を教える。彼女は若者に弄ばれ死んだのか?泉の力を借りて真相を探る麻子に、死んだ美佐子からメールが届く…。女性の孤独と切なさが胸を打つ恋愛サスペンス。 ああ、つまらない、つまらない矢口敦子。2冊続けて読んだが、眼の光がこう言っていた、みたいな表現が多すぎる。なんて文章のへたな人だろう。主人公の性格づけも共感を持たず、居心地が悪くなるおとなの女ばかり。読みながら苛々してしまい、身体に悪いご本でした。
風の墓名碑 (上下巻)	乃南アサ	白骨死体、今川老人殺害事件、父娘惨殺事件。これらの事件に関連はあるのか。一方、刑事を騙る男が捜査を攪乱する。目的は何なのか。誰が情報を漏洩しているのか。深まる謎と謎が交錯し、溶け合っていく。人間の欲望という業が生み落としていく悲しみをスリリングに描くシリーズ最高潮の人間ドラマ。 以前に読んだ「凍える牙」と同じ女刑事が主人公と知らずに読んでいた。この本にも「犯罪を犯す」が登場した。乃南アサなら、ま、仕方ないかって感じ。

虚夢	薬丸 岳	<p>愛娘を奪い去った通り魔事件の犯人は「心神喪失」で罪に問われなかった。運命を大きく狂わされた夫婦はついに離婚するが、事件から4年後、元妻が街で偶然すれ違ったのは、忘れもしない「あの男」だった。</p> <p>刑法三十九条がテーマのわりに新しい話じゃなく、出てくる人がステレオタイプ。</p> <p>ここにももはや当たり前のように出てくる「犯罪を犯す」。うーん、頭痛が痛くなってくるぞ。</p>
夕暮れの女 ～南町同心早瀬惣十郎捕物控	千野隆司	<p>煙管職人の佐之助は、かつての恋人で今は老舗足袋問屋の女房おつなと再会した。帰途、誰かに追われている女の世話をする。一方、おつなはその日の夕刻に絞殺された。拷問にかけられた佐之助は罪を自白、死罪が確定する。しかし彼の無罪を信じる恋人と幼馴染みは、南町同心早瀬惣十郎とともに再調査に乗り出すのだが…。書き下ろし時代ミステリー。</p> <p>DGにもインタビューで登場してもらった千野さん。作家活動は順調のようです。</p>
伽羅千尋 ～南町同心早瀬惣十郎捕物控	”	<p>紙問屋の主人・富右衛門が全裸死体で発見された。南町同心の惣十郎は現場で、少し甘いような上品なおいに気づく。そしてそれが「伽羅千尋」という高価な香だということをつきとめる。犯人が残したもののなか!? 心が行き違ってしまっている妻を気にしながらも、惣十郎は探索に精を出す…。南町同心早瀬惣十郎捕物控、第二弾。</p>
ダブル ジョーカー	柳 広司	<p>結城中佐率いる“D機関”の暗躍の陰で、もう一つの秘密諜報機組織“風機関”が設立された。だが、同じカードは二枚も要らない。どちらかがスペアだ。D機関の追い落としを謀らんとする風機関に対し、結城中佐が放った驚愕の一手とは――。表題作「ダブル・ジョーカー」ほか、“魔術師”のコードネームで伝説となったスパイ時代の結城を描く「枢」など、5編を収録。「ジョーカーゲーム」の続編。</p>
書店ポップ術	上原潤一	<p>娘の卒論の資料としての一冊。川崎の有隣堂の店員が書いたポップの写真がずらずらっと出ている。売れなかった本が自分のポップのおかげで爆発的に売れたと自慢しているが、名作はあまりない。絵のヘタウマは愛嬌だが字が下手なのは致命的。</p>

映画編	金城一紀	<p>笑いと感動で胸が温くなる傑作ぞろいの作品集。『ローマの休日』『太陽がいっぱい』など不朽の名作をモチーフに、映画がきっかけで出会った人々の友情や愛を描く。公民館でやっている『ローマの休日』を各章に出てくる人たちが見に集まってくる。最後の章で、おばあちゃんのために上映をするまでの若い人たちの奮闘が書かれていて面白く読めた。</p>
何が何だか	ナンシー関	<p>テレビ界に物申すナンシー関。かなり辛辣な内容もくすりと笑える文章の軽妙さ。「雑誌秘宝館」であらゆるジャンルの雑誌を読む章が面白かった。ナンシー関のグリコさんは、ハードディスクに沢山保存出来る今の時代に、ビデオデッキ5台を駆使してたナンシーさんを思い出し切なくなるそう。39才で亡くなって7年。今のテレビやタレントをスッパーンと小気味よくぶった切って欲しかった。惜しい。改めて合掌。</p>

ついにあの大読売新聞にも載っていた。  
 もしかしたらこの言葉は私の知らない間に  
 正しい日本語と認識されていたのかと  
 悩んでしまう今日この頃。。

